

基調講演 「21世紀を子どもの世紀とするために」

国立小児病院 名誉会長 小林 登

「健やか親子 21」第1回の全国大会の基調講演にお招きをいただき、大変ありがとうございました。光栄に思います。厚生労働省、「健やか親子 21 推進協議会」、関係者に心から御礼を申し上げます。最初に厚生労働省からご連絡をいただいたときには、「21世紀を子どもの世紀にしよう」というタイトルだったのですが、私は「21世紀こそ子どもの世紀にしよう」と変えて欲しいと申し上げました。というのは、1900年にスウェーデンのエレン・ケイという人が、「児童の世紀」という本、バルネット・アールフンデラート、これが正しい発音かどうかわかりませんが、そういうタイトルの本を出版しております。それが日本では富山房から「児童の世紀」として訳され出版されております。

このエレン・ケイという人は教育学者と言ったらいいと思うんですが、思想家でもあり、スウェーデンの女性運動のリーダーだった人でもあります。1800年代の中頃に生まれて、1900年代ちょうど私が生まれた頃ぐらいに亡くなった方です。スウェーデンは当時、ヨーロッパでは経済的にも立ち遅れていましたし、いろいろと問題が多かったわけですが、ヨーロッパが豊かになり始め、しかもフランス革命のあと、権利思想も芽生えて、子どもたちや女性ですね、特に女性、子どもというものが取り残されている実情に目をやって、何とかその地位を高め、子どもたちの世紀にしようということを提案したわけがあります。一方、この人は恋愛至上主義を提言いたしまして、結婚の前提は男女の恋愛でなければならないという考え方の提唱もしたのであります。現在の我々にとりましては、そんなこと当たり前という話になると思うんですけども、当時は、恐らく結婚というものはそれぞれの階層によって、いろいろと違った格好で行われていたに違いないわけがあります。そういった意味で、彼女もいろいろな影響を与えました。特にスウェーデンの福祉国家を作るということには、彼女の提案、運動は強いインパクトになって、それが花開いて、現在のスウェーデンの福祉国家ができたわけがあります。

もちろんこの本は、いろいろな言語に訳されて、先ほど申しましたように、日本語にも訳されたわけですけども、子どもに関心のある人々には彼女の考え方に共鳴して、何とか新しい世紀を児童の世紀にしたいと動いたわけです。しかし、ご存じのように、20世紀を見ますと前半は2つの世界大戦、第一次、第二次世界大戦がありましたし、特に第二次世界大戦は戦争の科学技術化と言ったらいいと思いますが、科学技術の進歩のお陰で、逆に言えば戦争の技術が大幅に進みました。その最も進んだ格好が原子爆弾だと思うんですが、それらを使うようになって、悲惨なことがたくさん起こっているわけです。特に、戦争に直接関係のない女性や子どもたちが犠牲者になるというような、大きな悲劇を作ったわけがあります。それじゃあ、20世紀の後半はどうだったろうかと考えてみますと、発展途上国では資源や領土や宗教をめぐる紛争や局地戦が展開さ

れて、第二次世界大戦と同じようなスケールではございませんけれども、それなりに悲劇が繰り返されているという現実があります。私たちはアフリカや中近東でそういう姿をテレビで観ることができるわけですね。しかも、そういった戦争に直接間接影響を受けて、栄養失調や栄養失調に伴う感染症、さらにはエイズの問題だとか発展途上国はまだまだ 20 世紀を児童の世紀として過ごせたとはいえないわけでありませぬ。しかも、戦争は治まったかと思うと、地雷のために手が飛び、足が飛んでいるような子どもたちの姿がたくさん、私たちの目の前にテレビで映ってくるような時代になっているのであります。先進国はどうだったろうか。これも考えてみますと、先進国は科学技術のお陰で非常に豊かな社会ができました。そのため子どもたちの体は健康に育っていると言えるかと思えますけれども、我が国を始め、多くの先進国では子どもたちの心の問題、さらには虐待の問題等々、数え上げればきりがありません。

最近、特に我が国においては子どもたちに対するいろいろな問題が多発し増加しています。教育問題にしろ、虐待問題にしろ、暴力問題にしろ、いろいろな問題を私たちはいつも目にし、子どもに関心を持つ皆さん方も、これでは 21 世紀はどうなるんだらうかと心配なさっていると思えます。考えてみますと、我が国のこういう問題はアメリカや欧米にヨーロッパに比べれば、まだまだ統計の上では頻度が低い。これは私たちにとっては考えなければならぬ大きい問題だと思うんですね。それは日本人の持っている心の、子どもたちに対する「やさしい目」と言ったらいいと思えますが、そういうものによるのだらうと思うんですね。今日、児童福祉の 50 年の歴史の中を見ても、日本があの戦後の荒廃の中で、子どもたちに対して、いろいろなことをやってきたということは、他の国に誇れるものではないかと、私自身は思いながら拝見をしておりました。最近、ある統計を見ましても、80%から 90%のお母さんたちは、我が子が可愛いと。我が子を育てることに生き甲斐を持っているというようなデータもあります。ですからまだまだ我が国は救われているんだらうと、私は思うんです。しかし、私が小児科学を志した第二次世界大戦後から現在までの流れを見てみますと、問題は悪化し、重症化していることだけは否定できないし、また頻度も徐々に増加していることも認めざるを得ないと思うんですね。児童相談所という行政の一つのステーションで見ている虐待問題も、1 年間に 1.5 倍に相談件数が増えたと。これは厚生省のご指導によって予防的に処置をするという、早めの報告をするというようなことが関係していると思えますけれども、増えているということを私たちも認めざるを得ない状態になっているわけでありませぬ。ですから今こそ、子どもたちのために何か出来ることをして、そして 21 世紀こそ子どもの世紀にしなければ、こういった問題は解決できないと思うわけでありませぬ。

我が国の 50 年間の福祉の歴史を見てもそうですけれども、子どもに対して国際社会でも、それなりに努力をしてきたと言えると思えます。それは先ほども子どもの権利条約のビデオが流れましたけれども、そういった意味では子どもの権利を認めたとすることは、一つの大きな人類の歴史の中での進歩だったと思うんです。もちろんその前に、

女性の権利が認められたということがあります。私は国際小児科学会に、1977年から89年のちょうど12年間ほど関係しておりましたので、その間に国際児童年だとか、児童権利条約というようなことがありましたものですから、国際小児科学会の役員としてWHOとの交渉とかいろいろなやりとりを、直接関係はしておりませんが、役員の代表である方々のやっていることを見たり、いろいろ報告を受けたり、相談にのったりする機会がありましたので、勉強する機会があったわけです。

人間が権利という考え方を持った歴史は800年かと言われております。それは800年ほど前にイギリスのマグナカルタで、大憲章ですね、それで貴族と僧侶が国王に対して、人間としての権利があると認めさせたということで、いわゆる人権と言いますか、人間の基本的権利という考え方が出てきたと言われております。しかし、それは貴族の権利であり、僧侶の権利であったわけでありますが、それが本当の市民の権利になったのはいつかという、これはアメリカの独立戦争とフランス革命なんですね。ですから1700年代の後半になって、やっとそれが市民の権利になったわけです。アメリカの独立戦争もフランス革命も、その権利を獲得するためには、血を流しています。戦いをやっているわけです。しかし、そうやって勝ち取った権利は、どういう権利であったかと言いますと、それは男の権利だったわけですね。男性の権利だったわけです。女性の権利と子どもの権利が、ある意味では取り残されていたと言えるわけです。しかし、女性にしる子どもにしる、彼らが運動を展開するというようなことは、ほぼできないというのは、どなたもご理解できると思うんですね。それを、第一次世界大戦、第二次世界大戦という戦争の経験もあってのことだと思いますけれども、イニシアティブをとったのは第一次世界大戦後の国際連盟であり、第二次世界大戦後の国際連合なわけですね。第一次世界大戦で国際連盟が女性の権利とか、すべての民族に基本的な権利があるんだと、女性も子どもも皆同じなんだという発想で権利宣言をするわけですが、そこで運動を展開し始めて、それが挫折するわけですね。第二次世界大戦が始まったものですから。それで第二次世界大戦が終わったときに、あらためて再び国際機関は動き出して、女性の権利と子どもの権利というものを確立する運動が始まったわけです。1948年に、すなわち第二次世界大戦後、世界人権宣言、これはある意味でいうと国際連盟がやったことを再確認したというふうに、私は考えてもいいんじゃないかと思えます。ついで75年だったかと思いますが、女性の権利で、最後に子どもの権利になったのです。すなわち、1959年に子どもの権利宣言をして、89年に子どもの権利条約を結び、90年に世界子どもサミットを国連で開いて、「子ども最優先の原則」を確立したわけです。すべては子どものために、子どものことはすべてに他のことを超えて最優先にやっというこを、確認したわけであります。

これは考えてみると国際連盟にしる、国際連合にしる、そういう権利の問題を人類の共通の考え方として取り上げたということは、歴史的に大変意味があると思えます。今、コソボで大統領を国際法廷裁判に引っ張り出して、裁判をしようという発想も、ここに

あると、私は思うわけでありませぬ。すなわち長い800年の歴史の中で、やっと基本的人権が女性まで、子どもまで権利が認められたこの世界において、他民族を虐殺するというようなことは、どんなことがあってもしてはならない問題で人間の基本的権利の侵害であるという考え方それ自体が、人類の共通財産として大切なことではないかと思ひます。第二次世界大戦の後半、終わりぐらひになりますと、連合軍にはヨーロッパ、特にポーランド地域では、子ども、他のもちろん大人も強制収容所に入れられていたわけですが、子どもたちもそういう目に遭っている、早くから探知されていたそうでありませぬ。連合軍がポーランドに進駐したときには「いち早く子どもたちを救え」というスローガンで、それぞれの子どもたちの収容所をあらかじめ調べてあったらしいのでせうね。そういうところへ連合軍の兵士が行って救い出したということをおは国際小児科学会の理事会で聞きました。コルチャック先生というポーランドの収容所に入れられる子どもたちを救おうとして走り回る先生の映画をご覧になった方もあると思ひますが、ドイツのナチによってポーランドではたくさん子どもたちが犠牲になったわけでありませぬ。ポーランドの郊外に戦後、世界の各国からの拠金によって建てられた、そういった子どもたちを弔うという目的で建てられた、子どもの病院があります。500床の立派な病院でありますけれども、私も国際小児科学会の会長をしているときに、招かれて見に行く機会がございまして、考えさせることがたくさんありました。私たちが思っているよりも、なんて言うんでせうか、ヨーロッパの先進国の人たちの権利に対する考え方、そして子どもたちに対する権利の考え方が強いことを、思い知らされる機会でありませぬ。

我が国は幸いなことに、先ほどの50年間の児童福祉の歴史を見てみても、子どもの権利は他の国に比べれば、はるかに恵まれているというふうにお思ひます。もちろん、最近になって虐待の問題が出てきたり、いろいろな問題がありますから、すべて良しというわけにはいきませぬ。他の国の実情を見ますと、まだまだいいんではないかなあというふうにお思ひます。子どもには成長する権利、すなわち体がちゃんと大人に育っていく権利です。それから発達する権利、心がちゃんと大人のように、知識も含めてそういうものが育って、発達させる権利があるという、すべてがそこに尽きるとお思ひますが、生まれても国籍のない子どもたちとか、まだまだ私たちには考えられないような実情が、発展途上国にはあります。アフリカの親たちは、特に北アフリカからヨーロッパに出稼ぎに来ていても、娘がある年齢に達すると、割礼のためにわざわざアフリカに帰って女性の割礼をやるというようなことが、国際小児科学会の理事会で問題になっておりました。この権利という考え方は、非常に重要でありまして、21世紀は子どものことを考える場合には、それぞれの局面で子どもの権利という問題を考えることなしに、問題は論じられないと思ひます。

さて、豊かな社会で、なぜ子どもたちにこのようないろいろな問題が起こっているんだろうかということをおは、私たちはまず考えなければいけないと思ひます。なぜこの豊か

な社会でということですね。豊かさは何が作ったかと言いますと、それは科学技術ですね。科学の進歩によって作られた発展した技術によって現在の豊かさが作られているわけです。例えば私たちの身の回りにあるプラスチックは科学技術の進歩によって作られ、それを利用して、いろいろな物が簡単に大量生産できるような技術によって、作られているからなんですね。もちろん医療の中で、例えばインシュリンを使うような病気、糖尿病の場合には、昔は動物の組織から抽出したインシュリンを使っていたわけですが、現在では人間のインシュリンの遺伝子を細胞の中に入れて、その細胞を培養して大量のインシュリンを作ることができる。つまり科学技術によって、私たちの必要なものをどんどん作っていけることができるような時代になったわけです。

そういう科学技術の基本的な考え方は、何にあるかと言いますと、それは1600年代の初めにフランスのデカルトの言い出した考え方によるわけです。デカルトは1590年代に生まれて1650年代に死んだわけですから、50数歳で今からみれば、大変若くして亡くなられた方の方であります。彼が言い出した、皆様もご存じの「我思う、故に我あり」でコギト・エルゴ・スムという考え方がありますけれども、彼が科学的にもの考えるということは、自分と他人を分けて考える、自他分離で考えなきゃいけないんだということが全ての始まりです。客観的にものを考えなければ、科学は成り立たないという考え方ですね。方法序説という考え方で、それを提唱したのは、現在の自然科学体系のすべての基盤であるというふうに考えられております。すなわち要素還元論という言葉で表現されますけれども、すべてを細かく分けて見るという考え方にするのです。ですから私たちは、今、生き物を見れば細胞から遺伝子まで考えるようになってしまった。今、我々はものを見れば、分子、原子まで考えるようになってしまったということです。そういう考え方が非常に科学技術の進歩に有効に作用して、大量生産を可能にらしめたわけがあります。

プロイラーチキンですね。私が子どものときに、鶏を食べるといえば、鶏の肉の塊がうどんの汁の中に一つか二つ転がっているか、カレーライスに一つか二つ、肉の破片が転がっていれば鶏を食べたことになったわけですね。今、子どもたちが鶏を食べるといえば、足1本を、意味していると思うんですね。それは何かと云ったら、プロイラーチキンの技術ですね。いかに鶏を早く肉をつけて増やして、機械的にどう処理してやるかというような、そういう科学技術がそこにはあるわけです。自動車もそうですね。毎年、きれいな自動車がどんどん出てくる。モデルチェンジをしては新しい自動車を作っては売り込むって言いますか。その繰り返しの上にすべてが成り立っているような社会になってしまったわけがあります。

しかし、今、私たちの身の回りを見てみても、これでほんとにいいんだろうかと考えさせられることが山ほどあるんじゃないかと思えます。生活廃棄物の山ですね。私も今日、我が家を出てくるときには、今日は生ゴミと可燃ゴミの日でありまして、出てきた路地のところには何軒の家から出た生活廃棄物の袋が山のようにありました。産業廃棄

物の山になったら、これはどうでしょうか。瀬戸内海のある島は全部、産業廃棄物で埋まっちゃっているというところがあるではないですか。環境汚染、森林破壊、海洋汚染、そして温暖化、次から次にといろいろな問題が出てきております。ほんとにこれでいいんだらうかと、どなたも考え始めたんじゃないかと、私は思います。温暖化の問題も、この間、ある会でディスカッションをしたら、温暖化して、これが進んでいって温度が数度上がると、昆虫や微生物なんかワッと増えて、日本中病気が流行して、それこそ大変なことになるんじゃないかと。それこそ新しい伝染病も出てくる。そういうような問題が出ている。もっとも日本は食糧にしる、石油にしる、全部輸入に依存していますから、ちょっとしたことで、それはストップすれば、すべておしまいという状態になっているわけであります。こういった生き方をほんとに続けていっていいんだらうかと、みんな考えていると、私は思うんですね。しかしそうかといって、昔のように帰るわけにはいきませんから、今、ほんとに新しいパラダイムでものを考えながら生きていく術を考えなきゃいけないか、というふうに、私は思うんですね。

こういった自他分離の考え方は科学技術だけでとどまっていない。すなわち人間の心のあり方、人間の諸活動の基盤にも影響を与えているわけです。物質万能主義だとか、拝金主義だとか、利己主義だとか、個人主義だとかというような、私たち本人が昔は「やさしい社会」と言っていた社会、老人を大切にするというような、電車の中に老人が入って来たら席を譲ってあげるとか、お腹の大きいお母さんがいたら席を譲ってあげるといような社会がそうでなくなっていることにも、そういったものの考え方が影響しているのではないかというふうに考えられるわけであります。

これは科学技術庁に約 10 年ぐらいの間、人間の諸活動の基盤に関する研究班というのがありました。そこでは何も哲学者が集まって勉強しているんじゃないんですね。自然科学の専門家の研究班ですけども、そこでいろいろディスカッションをしたわけですが、今、私たちはパラダイムを転換して新しい時代をどうやって生きていくかを考えなければならないという問題を論じたわけです。それは何かと云ったら、デカルトの言い出したカルテシアン哲学を取り込んで、それを否定することなく超えなければいけません。否定すれば、私たちの豊かな社会を否定することになりますから。それを取り込んで乗り越えて、そして自他非分離といいいますか、関係だとか、一緒に生きるとか、一緒に作るとか、そういうような考え方をするような社会を作らなければいけないんじゃないか。共生とか、共創とか、場所だとか、関係だとかというようなことを考える考え方に転換しなければいけないというものが、結論であったわけであります。私自身もその班の中で勉強していて、非常に面白かったし、勉強になりました。ドイツでさえもそういう考え方を持っている。

ドイツの学者も我々以上に熱心なのです。今度は原子力発電も閉鎖するというようなことを言っておりますし、ああいうことを見ていると、やはりドイツ人の中にもそういう考え方が出てきたと思うんですね。特にドイツは西田哲学の場だとか場所という考

え方に非常に興味を持っているそうですね。研究班でその話が出て、私は非常に驚きを感じたわけですが、ドイツでは「場」という考え方に対応する言葉として、「シントピー」という言葉を使っている。シントピーというのは、「シン」というのは合わせる、「トピー」というのは場所という意味です。西田哲学になると私にもちょっとわからないところがたくさんありますから、全部理解したとは思いませんけれども、そういう考え方をドイツでさえも考え始めているというところを、私たちが考えなければいけないんじゃないかというふうに思います。彼らは東洋的な考え方、日本人的な考え方も取り入れたいと言っているわけですね。ですから私たちは、カルテシアンの哲学で育てられたリダクショニズムを取り込み、乗り越えて、もう少し関係だとか、一緒に生きるとかということを考えなければならぬときに来ているんだと思うんですね。しかも欧米先進国のドイツでもそういうことを考えているというところを、私たちは注目しなければいけないと思います。

今の小泉内閣が、構造改革ということで、いろいろなことをやろうとしている、その考え方の基盤にも、私はこういう考え方があるんじゃないかと思います。中央と地方というものをきれいに分けなくて、むしろ地方に中心を移して新しい行政システムを作るとか、道路の財源を道路だけに限らないでうまく使うと。これももちろんお金もなくなったということも関係していると思うんですねけれども、行政の専門家のいるところでそういうことを言うのは恥ずかしい話ですが、私はその裏にある考え方、そういう何でも分けてやるだけでは済まされないような時代になってきているというふうに思うわけです。文部省も自然科学系と人文科学系を融合する新しい科学を育てるという発想を強気に推進する、文理融合科学という言葉を使っているそうでもありますけれども。医療も同じですね。最近は医療も福祉も保健もバラバラにやっていたんじゃないかと駄目なんだと。なるべく結びつけてうまくやろうじゃないかという話もありますし、国立小児病院も単にライフステージの中の一つのセグメントとして子どもを診るのではなくて、ライフサイクルの中で子どもというものを捉え直して、新しい成育医療センターにしようというのも、そういう発想であります。雇用均等・児童家庭局なんていうのも、雇用均等・児童家庭局って、私はあんまり結びつかないような気がしますけれども、女性の雇用均等機会ということを考えて、児童家庭局と結びつけたものだと思いますけれども、これも見方によればカルテシアンの哲学を超えていこうという行政の中の基本的な考え方じゃないかなあというふうに思います。

最近、話題になりました「子ども学」だとか「赤ちゃん学」。私は今、神戸の女子大で月に一回、勉強会に行っておりますけれども、そこでは学部改編のアイデアとして、「子ども学」として文部省に出したら、それも通ったと言うんですね。昔は「子ども学」というと、何だということになったに違いないと思うんです。それも文部省が文理融合の科学として、「子ども学」を認めたからだろうと思うんですね。「子ども学」というんではっきり打ち出して大学の申請をしているところもあるというふうに、私は伺ってお

ります。「赤ちゃん学」というのも、私は赤ちゃん学会の理事長をしていますが、これも新聞沙汰になりましたが、学会の構成員は小児科の医者が大体 20% くらいですね。産婦人科の関係が 10% くらい。保育、教育、心理がそれぞれ 10% くらいずつですね。それに脳科学をやっている人、さらにはロボットをやっている人も入っているんですね。そういう人たちがみんなて話し合おう、問題を解決していこう、新しい学問を作っていこうという考え方ですね。今、我々が当面している育児や、虐待や、教育や、それに関する子どもの問題というのも、ある特定分野の専門家だけでは解決できません。もちろん従来からそういうものを解決するためには、みんなて話し合おうという雰囲気は、私はあったと思うんですね。それはもう私が大学を出てからも、そういう発想はいつもありましたし、アメリカではそういうことが早くから強調されていました。しかし単なる話し合いをするのではなくて、みんなて一緒に考える基盤理念を作り上げることが非常に重要だと思うんですね。それがいわゆるものの考え方の転換、パラダイムの転換というふうに言えると思うんです。

さて、21 世紀こそ子どもの世紀にするためには、どうしたらいいだろうかということとは、これはやはりここに書いてありますように、「やさしい社会」を作るということだろうと思うんですね。今、あまりにも自他分離で細かく分けすぎて、要素還元論でものを考えすぎて、それが科学技術のためだけならば、それなりに意味があると思いますけれども、それが人間の諸活動まで影響されていて、あまりにも人間関係が希薄になり、「やさしい社会」でなくなってしまったというところに、私は問題があるんじゃないかと思うわけです。第 1 回のこの会で、「やさしい社会」を作るということが、大きく取り上げられているということは、大変に私は意味のあることだと思うんです。20 世紀の反省から考えれば、それは火を見るよりも明らかなことであって、もちろん子どもたちに何をするのができて、何ができなかったか。先ほど宣言でもお話が出ておりましたけれども、そういったことをよく考えなければいけないこともありますし、もちろん子ども観、新しい子ども観ですね。それは権利を持つ社会的存在としての子どもという考えでなきゃいけない。これもぜひ、協議会の方々でお話し合いの場を作って、新しい子ども観を作る必要があります。子どもを我々は大人としてどういうふうに捉えるか、どういうような大人になってもらいたいのか、というようにことをまとめなければいけないと思います。私は「子ども学」という学問を体系づけて、子どもに関心を持つ人々がみんなて話し合える学問的な基盤を作りたいというふうに、考えてきているわけです。その上に「やさしい社会」はどうであるか、どのような社会であるかということ、考えなければいけないんじゃないかなと思っているわけでありませう。

一番重要なことは、子どもは生物学的存在として生まれて、社会的存在として育つということだと思うんですね。生物学的存在というのは何かと言ったら、それは我々の子どもは父親と母親の遺伝子によって作られたものである。言うなれば心臓の動きも、猫の心臓の動きでも理解できる、腎臓のことも実験動物の腎臓でもって我々子どもたちの

腎臓の機能をほぼ 100%、理解できるわけですね。この生物学的存在っていうものは、現在のそれこそカルテシアン哲学の最も開花した遺伝生物学によって、はっきりと生物学的存在というものは明らかにすることができるわけですね。社会的存在として育つ。これもよくわかりのように、赤ちゃんがこの世に生まれてくれば、家庭、学校、社会と、広くまとめれば社会の中で子どもは育っていくわけですから。そういう仕組みをどのように考えていくかっていうことが重要ではないかと思えます。

さらに、子どもはどのような役割を持っているか。人間にとって人類にとって、我々日本人にとって子どもはどのような役割を持っているかを考えなければなりません。それも私は二つあると思うんですね。一つは生物学的側面の部分であって、それは子どもの健康な体を次の世代へ伝えていくということですね。それははっきり言えば、遺伝子を伝えていくということになるわけであります。イギリスの社会生物学者は、それを身体内遺伝という言葉で呼んでおります。

もう一つは何かと云ったら、我々の文化を次の世代に伝えていくという役割を、子どもはしているわけですね。イギリスの社会生物学者たちは、それを身体外遺伝と呼んでいます。ですから遺伝子によって伝えられるものと、人間の心によって伝えられるものと言ってもいいと思えますけれども、心によって伝えられる文化というものをバトンタッチする役割を子どもたちは持っている。それを考えなければいけないと思えます。そういうことを考えるためには、これはまさに人文科学と自然科学の融合した新しい考え方でなければならぬわけであります。それが「子ども学」であり「赤ちゃん学」なのです。

その共通言語として、私は重要なのは、最近はやりのシステムだとか情報という言葉だろうと思うんですね。ですから私は共通言語としてシステム・情報論的な発想を持てばいいんじゃないかというふうに実は思っているわけです。もちろん、このシステムとか情報という言葉は、私たちが戦争中、戦後。もちろん戦前には学ばなかったし、戦後でもアメリカの文化が入ってくるまで、あまりはっきりとは学ばなかった考えです。アメリカ側は第二次世界大戦のときから、そういう発想を持っていたから、情報戦争をもって日本に勝って、我々日本が負けたということになるわけですが、

そういうシステムとか情報という言葉は、自然科学の人も人文科学の人も今、理解できるような言葉になっているように思うんですね。特に最近のように、ワープロだとかコンピュータだとかっていうものは流行りになってきますと、システムとか情報はほぼ常識になっていると思えます。システムとは何か。それはいろいろなものを集めてあることをするために作った組み合わせみたいなもんだってというような、これどなたも理解していると思うんですね。そのシステムには必ずそれを働かせるプログラムがあるわけです。ワープロだとかあるプログラムを入れて、英語のワープロを打つとか、あるいは日本語のワープロを打つというふうに、そういうそれぞれのプログラムを使っているわけです。そのプログラムを動かすものが情報なわけですね。そういう考え方で人間を見て

みると、お互いに話し合えるんじゃないかと、実は思います。

ちょっと少しはばったい話になりますけれども、どうしても私はそういう話になってしまふんで、それをもしつまらなかつたら寝てくださって結構です。じゃあどうしてそういう考え方ができるかということになりますと、もちろんデカルトも大体そういう人間機械論的な発想でもって、人間を見ようとしたわけですね。ですから、それ自体がある意味で言うと要素還元論的になってしまうわけです。私はこういうふうに思うんですね。たった1個の受精卵が2個になり、2個に分裂し、4個になり、4個が8個になり、8が16になり、32になり、64、128、というふうに倍々で増えていくわけですね。そうして増えていくと、そのうちにある細胞は脳の細胞になり、ある細胞は心臓の細胞になり、ある細胞は筋肉になりというふうに、細胞が分化していくわけです。その細胞の分裂、増殖、分化。そして脳ができ、心臓ができ、肝臓ができ、肺ができ、手足ができというふうになるわけですね。そういうことを見ておきますと、それは体というものは、例えば血液を流すというのは、心臓から始まって血管で全身をめぐる血管の網の中に、血液を送るシステムなわけですね。呼吸というのは空気を吸って肺に入れて酸素を取り込んで、残りを出してという呼吸のシステムですよ。そういうものを組み合わせたものが大きな体というシステムなんです。そういうものが自然に1個の受精卵からできる。難しい言葉で言いますと、自己組織化できる。これはロボットではそんなことは絶対できないわけでありまして、ロボットは人間が部品を組み合わせているわけですが、人間の場合はそういうものが自然にでき上がる。そういうものができれば、自然に動き出すプログラムもでき上がってしまうんですね。例えば妊娠がわかったかわからないかぐらいの胎児を見ても、もうそこには手足を動かしたり、小さな心臓の原型も拍動を始めているわけですね。そういう組織が自己組織化されると、できあがるとほぼ同じに、それを働かせるプログラムもでき上がって動いているというふうに考えることができるわけです。

ですから基本的な身体のシステムは、遺伝子ででき上がると同時に、基本的な体のプログラムも心のプログラムも遺伝子の情報によってでき上がるんだというふうに考えることができるわけです。それは胎児や新生児のことを勉強していれば、極めて納得のできる話なんですね。それが育っていく過程で、だんだんと人間として持っている知性の、そういう動かすことを知性のコントロールに持っていく過程が胎児期から始まって、特に新生児、乳幼児、学童と、あの時期に育てられること。つまり保育や育児や教育によって、そういうものが、システムがだんだんと集中的にコントロールされると言いますか、大脳の知性のコントロールに移っていくんだというふうに考えることができると、私は思うんですね。

そういうことを考えるいい素材を、いくつかお話しいたしますと、指を吸う。お腹の中の胎児は指を吸っているんですね、妊娠後半ぐらいになりますと。あまりにチュウチュウ指を吸って指だこができて生まれた子どもがいるというような報告が、スウェー

デンの新生児学会の雑誌に載っかっているそうです。私は原著を読んでいないんですけども。もちろんこうやって指をチュウチュウ吸ったために、腕にキスマークをつけて生まれてきた胎児の写真も見たことがあります。ですから指を吸うプログラムはもう胎児のときに働いているんですね。しかし、そのときは反射的・自動的なものであって、恐らく本人の意志とは関係がないだろう。たまたま指が入ったからチュウチュウと吸い始める。生まれたばかりの赤ちゃんだって、ちょっと指をやったら、チュウチュウと吸いますよね。そういうものなんですね。しかしそれがお母さんの乳首を吸ってチュウチュウと吸うときには、おっぱいが飲みたいという脳のコントロールに入っているわけです。我々がストローでジュースを飲むときには、ジュースを飲もう、ジュースを飲むということでもって同じプログラムを使ってやっているわけです。そういうふうに見えることができると思うんですね。

微笑む。ある産婦人科の先生が超音波画像で、「この赤ちゃんはにんまり微笑んでいるんですよ」というスライドを私にくれました。これはNHKの「日本人の質問」で出たんでご覧になった方もおられると思うんですけども。僕は一番最初にそのスライドを見せてもらったときに、「まさか」と思ったんですね。しかし考えてみると生まれたばかりの新生児でも、産湯に浸かっていい気持ちのときには、にんまりとすることがあるんですよ。これは反射的であって自動的なものであって、なんら意識のコントロールにはない、そういうものなんです。しかしその赤ちゃんが、やがてお母さんにあやされて笑うのは、大脳の大脳皮質の高度の精神機能の作用によって笑いにスイッチが入る。小学生の子どもが漫画を見て笑うのは、漫画を見て大脳の皮質でそれを理解し、おもしろさがわかって笑っているんです。我々、落語を聞いて笑っているのは、何かと言ったら、もっと高度な精神機能によってそれを理解し、笑っているわけですね。私はそこに人間の育つことの本質があるように思うんですね。ですから生物学的存在と社会的存在はどう結びつけるかということは、非常に重要なテーマだというふうに思うわけですね。

赤ちゃんが生まれたときにオギャーと泣きます。あれは生まれてきて万歳として泣いているんじゃないんですね。お産に驚いてびっくりして泣いているんです。お母さんと離れるから淋しくて泣いているんですね。その証拠になかなか泣きやまない赤ちゃんは、だっこすれば泣き止む。ということは、母子分離を不安と感じる心のプログラムだとか、驚いて泣くというような驚きを感じる心のプログラムはもう生まれたときに持っているのだと。恐らく、しかしそれがほんとの驚きや、例えば1カ月後の母子分離不安で泣き出すときの心の状態とは違う。むしろ反射的・自動的なものであるかもしれない。しかし重要なことは、そういうセットアップがもう生まれたときにはできているんだ。それが大脳のコントロールにうまく持っていくことが、私は育児や保育の根本だと思うんですね。もちろん落語を聞いて笑うようになるためには、それ以上に小学校や中学校に行って勉強する必要があると、私は思うんですね。そういう知識がなきゃ、そういうような笑いはわかりませんから。

もちろん産声はそれによって、呼吸のプログラムにスイッチを入れることによって子どもは呼吸を、生まれたとたんに呼吸を始めれば、死ぬまでその呼吸は続いているわけですね。あなた方が、今、私の話を聞いてくださっていますけれども、それでも呼吸のプログラムはちゃんと動いているわけですね。ただどもそのプログラムはあなた方がオギャーと産声を上げたときに、スイッチを入れたプログラムなわけですね。「ネオネーターラアラートネス、新生児覚醒状態」という言葉がある。泣きやんだ赤ちゃんは、頭が冴えていてやがて周囲を見回し始めるんですね。そして何か関心があると、ちょっと視線を止めたりする。

アメリカのファンツという心理学者が、その生まれて間もない赤ちゃんの前に同じ大きさの赤丸、黄色丸、白丸、同心円の丸、新聞紙の丸、人間の顔を書いた丸を、ずっと並べてみると、赤丸、黄色丸、白丸、ほとんど同じだと言うんです、注視時間が。同心円の丸になると少し増える。新聞紙の丸になるとぐっと増える。人間の顔になるともっと増えるということを報告しているんですね。それをもうちょっと科学的に言いますと、情報の量が増えれば増えるほど、赤ちゃんはじっと見るということになるんです。ということは生まれながらにして、そういう情報を求める心のプログラム、好奇心のプログラムと私は呼んでいるんですけれども、そういうものもちゃんと持って生まれてくるんだというふうに考えられます。

私はもう皆さん方に、十分に説得できたと思うんですけれども、そういう基本的なプログラムを持って生まれてくる。それが育つ過程でそういうものを組み合わせて複雑なことを理解し、複雑なことに対応するプログラムの新しい組み合わせを作っていくことに育児や保育や教育が関係している。言うなれば大脳皮質の支配にもっていく、そして大脳皮質の中でも、次々とより高度の中樞支配にもっていくことに育児や教育や保育が関係しているんだと。じゃあ、育児や教育や保育は何かと言ったら、それはその育児や保育や教育の人間のやりとりの中で、その子どもたちに情報を与えているわけですよ。情報を与えて。ですから情報がプログラムにスイッチを入れていると思うんですね。

最近、その情報を2つに分けて考えたほうがいいんじゃないかという考え方があります。つまりロジカルインフォメーション、知性の情報、それからセンシティブインフォメーション、感性の情報ですね。知性の情報というのはコンピュータのことをご存じの方はよく理解できると思いますけれども、コンピュータの二進法でイエス、ノーで処理できる情報ですね。ところが感性の情報というのはそういうもので処理できない、人間の心のプログラムを動かす情報と考えたらいいんじゃないかというふうに思うんですね。その2つがあるというふうに考えるべきだと思うんです。例えばお母さんが我が子に語りかけるときに「いい子ねえ」と言っている。「いい子」と言うのは、これは知性の情報ですよ。そのとき独特の抑揚やリズムやピッチで語りかけるわけでしょ。ボーイフレンドとガールフレンドが話しているときだってそうですよ。言葉の内容を音声に

乗せて、私たちはコミュニケーションをしているわけですが、その言葉の部分は知性の情報ですね。しかしそのときの雰囲気だとか言葉の調子だとかそういうものは感性の情報になるわけですね。その感性の情報が知性の情報と同じか、あるいはそれ以上に重要なんじゃないかということを、私は申し上げたいわけなんです。なぜならば、感性の情報は「やさしさ」と表裏の関係にあるから。ですからどんな人間の営みを見ても、常にそういう考え方で見たらいいと、私は思うんですね。

そういう感性の情報がいかに重要かというのは、これはもう日常茶飯事、あなた方が体験することだろうと思うんですね。もっともきれいに見ることができるのは、私たち小児医療の現場で見ると、何かと言えば、デプリベーション・シンドロームと言いますか、剥奪症候群といって、可愛がられない子どもの体の成長が遅れ、知性の発達が遅れたりするということのようなことがわかるわけですね。そういうことでもわかるし、お産のときにコンティニアス・エモーションナル・サポート、「やさしい勇気づけ」をすると、お産が軽く済む。これも多くの方は体験している。立ち会い分娩のときにご主人が手を握ってくださったのとくたさらないのでは、違う。もちろん女性で、そんなところに立ち会ってもらいたくないという人もいるかもしれませんが。ということは皆さんもご存じのように。そういう感性の情報が心のプログラムを動かすから、成長が止まった子どもの場合は、「やさしさ」が足りないために成長ホルモンの分泌が止まって、身体が成長しないわけですね。お産のときにやさしい支援があったかないかによって陣痛の力が弱くなるという、これも極めて明快に説明できる。なぜならば、お産は経産婦なら別ですけども、特に初産婦の方は自然の営みだといっても、やはり不安なわけですね。それを助産婦さんが、あるいは産婦人科の先生が「大丈夫、大丈夫」と言ってくれる、あるいはご主人が立ち会ってくれるということによって、安心すれば、陣痛はスムーズに動く。それが無い、不安が強くなるとアドレナリンが出ますと、血液の流れが変わったり、陣痛の、子宮の収縮力が落ちたりするからなんです。そして大量出血を起こして、不幸な事態さえも起こす。やさしい一言の勇気づけによってさえも、お産のあれが違ってくる。

そういうことから、いかに感性の情報が重要かということは、どなたもおわかり。これは仕事をしてても、職場で上司がガミガミ怒鳴りつけるだけの人だったら、仕事がうまくいかない誰かが知っていることですし、ちょっとしたことを「ありがとう」とやさしく言ってあげる、「ごくろうさん」と言ってあげるということだけでも、仕事がうまくいくということは、どなたでもご存じですね。夫婦関係だってそうですよ。ですからそういうことから考えると、いかに感性の情報が重要か。知性の情報もちろん重要なわけですね。だけれども感性の情報も重要なんだと。感性の情報が単に「やさしい」から重要なんだというだけではすまされないようなことが、最近の脳科学の進歩でいろいろわかってきているわけですね。例えば快感だとか、幸福感、そういうようないい気持ちになるというときにはドーパミンが関係しているとか、幸福感にはセロトニンが関

係しているというような、そういうようないろいろなニューロペクタイドも含めて脳内物質、そういうものがはっきりしてきたんですね。

そういうことがありますから、例えば最近の子どもたちの子育ての現場、施設での保育の現場にしる、家庭での育児の現場にしる、そういった「やさしい親」によって育てられるか、育てられないかということが、極めて重要だというふうに考えられ始めてきたんです。恐らく、そういう脳内物質、ドーパミンにしる、セロトニンにしる、そういうものの分泌がああのプログラムの組み合わせだとか、そういうものを作るときに作用している可能性が極めて高い。もちろん学問はもうちょっと進みませんと、そこまではっきりは言えないかもしれませんが、重要な役を果たしている。少なくとも動物のレベルでは否定はできない。人間のレベルではどうなっているかということは、これからの問題だろうと思うんですね。脳のそういった物質は脳の広い範囲でゆっくりと作用して、脳の活動に影響する。ですから胎児期や新生児期。胎児期の場合は母親に守られていますから、ほとんど問題はないと思いますけれども、生まれてからの社会的存在として育つ、あの乳幼児期にはそういった感性の情報が豊かなやさしい子育て、保育、育児によって育てられるということが、非常に子どもの脳の発達、心の発達にとって重要なんじゃないかというふうに思います。

ベーシックトラスト。基本的信頼を作る。人生は平和である、私を取り巻いている人たちは信じられる存在である、ということを経験によって作らないと、その子どもは後々、人間関係を保つことができない。基本的信頼の形成。それは私は、基本的信頼とは何かと言ったら、いろいろな心のプログラムが信じるというプログラムによって集約されるというふうに、私は考えてもいいんじゃないかと。3歳になると「心の理論」ができあがるといわれています。これは心理学の大きなこの10年来のトピックですけれども、心の理論というのは、他人の振りを見て、その人が何を考えているかわかる。そのときに私たちは、心の理論ができたというんですね。それは前頭葉のこのへんに、心の理論ができたときに働く脳神経細胞のネットワークがはっきりとわかっているそうでありまして、そういうようなことを考えますと、少なくとも3歳、小学校に入るまでのあの小さい時代の育児・保育・教育というものは、私は非常に重要であり、特に感性の情報が豊かな、平たい言葉で言えば、「やさしい生活環境」を維持するということが必要なんじゃないかと。すなわちそのために、「やさしい社会」を作らなければいけないというふうに思うわけです。

最近、NICHD、アメリカの国立小児保健人間発達研究所で、幸い我が国の厚生省も同じような研究を始められたそうですけれども、アメリカのNICHDでは10年ほど前に1,300人の子どもを登録し、フォローアップして、初めのうちは毎月、専門家がチェックして、子育てがどの程度子どもたちに影響するかという研究をいたしました。その結果、私たちに教えていることが多いと思うんですね。母子関係、はっきり母親と書いてありますけれど、母親とその子どもの関係がちゃんとしていれば、ゼロ歳児保育

でも何でも子どもの成長・発達には関係ない。父親の子育ても夫婦が仲良ければ非常に
よろしい。考えてみれば当たり前のことですよね。それは何が大切かという、母親な
り父親なりが子どもの心を読み取る力を持つことだ。それからスキンシップ豊かなイン
タラクションをする、相互作用をすることだ。触れ合いの子育てだ。そういうことを強
調しているわけですね。もちろん、あまり長期に保育時間が延びたり、延びるような保
育をやった子どもだとか、それから保母さんの質が悪い、すなわち子どもの心を読み取
る力がなくて、触れ合いが少ないというような保母さんの場合には、それなりに子ども
の問題がある。子どもには攻撃性が出てくる場合があるということも報告されているわ
けです。もちろん攻撃性の問題は多少アメリカでも論議になっていて、いろいろ今、や
りとりをしているように伺ってますけれども。

そういうことを考えると、どうしても「健やか親子 21」というのは、やっぱりいつで
もどこでも子をやさしく育てることが基本だと思います。現在、子育てのパターンは何
も親だけではない。保育所、保育園を含めて、保育の専門の人と親とがチームを作って、
子育てが行われていると思います。そういう子どもたちに対する「やさしい目」さえあ
れば、問題がなく子どもはすくすくと育っていくに違いないと、私は思うわけです。そ
のためにも、その親子が生活する社会基盤が「やさしい社会」でなければいけない。こ
れは厚生労働省を越えて文部科学省にも関係してくるし、もっと大きな問題だろうと思
うんですね。そういうことを考えなければならぬ時代になっているんじゃないでしょ
うか。「21世紀こそ子どもの世紀にする」ためには「やさしい社会」を作りましょ
うということを申し上げて、私の講演を終わりたいと思います。どうもご静聴ありが
ございました。